# 自分の立ち位置

教授　高槻成紀

あまりはないが、冗談半分にいっていたことが本当になることがある。若い頃、登山をした。東北地方のおもな山には登った。人にはあまり会わないが、山頂に行けば小屋で人に会う。だいたいは 20 代の若者だが、たまに 40 代のおじさんに会うことがあった。自分も 40 歳にもなって（その頃、40 歳というのは想像のかなたにあった）、山を登っているだろうかと想像した。自分がその歳になり、「そのうち、山におじさんおばさんが登るようになるかもしれないな」と話したことがある。

今、山に登ると 20 代の若者にはほとんど出会わない。おじさんおばさんどころか、おじいさんおばあさんのほうが多いくらいだ。これからは事故の心配をしなくてはいけないだろう。

働きづめに働いた人が余裕を見いだして山に登るのはけっこうなことである。「山の怖さをしっているのかな」というという心配だけでなく、少し意地悪な感覚も覚える。「子供の頃から野山を歩いていたわれわれとは年季が違うよ。ほんとに山が見えているのかな」と。だが、これは大きなお世話に違いない。

＊＊＊

アファンの森財団に誘われて COP 10 にブースを出した。大学のプレゼンスを高めるために、意味のあることだと思ったし、それなりに楽しくもあった。だが、名古屋の会場だった広い公園を埋め尽くすたくさんのテントの末席に小さなブースにいて感じたのは複雑な感覚だった。

われわれは 4 畳半くらいの小さなテントだったが、大きいテントを占めていたのは名だたる大企業だった。私たち生き物好きがつねづね「敵」とはいわないまでも、対立感をいだいていた企業群だ。日本の戦後の復興を担い、世界に日本ありと存在感を示した起業たちである。そこで作られた日本のイメージは「一生懸命働き、器用に機械を作って、経済復興を果たした国」というものであった。そしてその実体は自然との関係でいえば、その破壊そのものであった。

「あいつらと同じ場で生物多様性の重要さを訴えるのか」。企業からも出資を受けたら、まちがいなく断っていたのだが、こちらの意向とはまったく関係なしに、「うちも出ます」ということになり、同じ側に断たされることをいかんともしがたい。まことに複雑な心境であった。

＊＊＊

そういう意味では今年が生物多様性年で、われもわれもと「私も生物多様

性がだいじだと思っていました」と我が物顔に語る人たちの感覚を疑う。まちがいなくいえることは、本当に動植物を好きな人は、COP 10 の会場でブースを開くのではなく、今日も野山を歩いて観察を続けているに違いないということだ。自分を恥じるような気持ちがあった。実体のない、はやりことばとしての「生物多様性」など、早く過ぎ去ってほしいと思う。